

学校だより

平成22年度 PTA クラス委員会・総会



5月1日(土)、平成22年度 PTA クラス委員会と総会が補習校図書館で開催されました。詳細は PTA 便りに掲載されますので、本号では、その概要等についてお知らせします。

開会の挨拶に続いて、本校の川瀬裕司運営委員長さんご挨拶をされ、各運営委員さんが自己紹介をされました。その後、私(校長)が本校の教育の目指すところや行事について話しました。教職員の自己紹介もありました。



次いで、平成21年度の松永宙子会長さんご挨拶をされ、議長選出となりました。選出された議長さんは平成20年度会長の今村邦子さんでした。今村さんのテキパキとした進行で、議(旧役員のみなさんと校長、議長)事が順調に進んでいきました。平成21年度の活動報告では、松永前会長さんや役員さんらが適切にされました。更に、奥原由佳利さんからショーイングジャパンの報告もありました。

新役員を選出は、つぎの方々承認されました。



(新役員のみなさん)

会長 泉川温子(小1)
副会長 吉保恭子(中1)
副会長 須田みづき(小1)
書記 川口浩子(小3)
書記 佐藤はるみ(小3)
次いで、新クラス委員の紹介や平成22年度事業案について説明と質疑があり、終了しました。



前松永会長さん始め役員の皆様、前クラス委員の皆様、大変にご苦労さまでした。教職員を代表して深く感謝を申し上げます。泉川会長さん始め役員の皆様、新クラス委員の皆様、今年度もよろしくお願ひ申し上げます。松永前会長「よろしくお願ひしますよ」、泉川新会長「はい、がんばってやります」と固い握手。

おこりんぼうのお母さん

小2B きしだ たかひろ (辻村学級)

ぼくのお母さんはいつもおこります。でも、ぼくのおねえちゃんには少しおこって、あまり おこりません。

ぼくは、お母さんの言うことを聞かなくやだめなのに、お母さんはお父さんとくだらないことばかり話して聞いてくれません。ぼくはそれはふこうへいだと思います。今日も、「ちゃんとやったらトンガリコーンをあげるよ。」と、言ったので、ちゃんとやったのに、くれませんでした。

お母さんはおおると白がが生えてきてしまうのに、ぼくのせいにしておこるくせがついてて、ぼくにはおこらないと生きていられないようです。こういう時の、お母さんの顔はまるでこわいおにのようです。

ぼくはときどき家出をしなくなります。こんなことを考えると、目がしらがあつくなってきて、どうしようもない気持ちになります。

今日は気分がわるいので、算数のドリルをつくえの下におとしました。もう何もやりたくありません。

「おこるくせがついてて、ぼくにはおこらないといきていられないようです」とありますが、たいへんなくせがついてしまったのですね。また、さいごの5行は校長先生もなみだが出そうでした。

でも、たかひろくんは、とつてもくわしくおかあさんのことを見ているのですから、きっと、いっぱいお母さんのことが大すきななのでしょうね。おかあさんもたかひろ君がすきですきでたまらないのですよ。たかひろくん君はお母さんのたからものなのですね。

ところで、現在、小学部2年B組のきしだたかひろ君が1年生(リッテンマイヤー学級)のときに書いた作文が、朝日小学生新聞「今月(3月)の特選作文」に選ばれました。おめでとうございます。

次号、第49号に掲載致します。とても粘り強く頑張った内容の作文です。

学習活動から

小学部3年生の課題「一番心に残ったことを題にしましょう」から、次のような作品が生まれました。

「ドキドキした避難訓練」

小3A 董 依琳(安田学級)

今日6時間目に、不審者が学校内に入って来たら、どうやって危険をさけるのかの、ひなんくんれんをしました。

校長先生とたんにんの先生のしじにしたがって、安全な場所に移動しました。そこには、けいさつがいて、わずか5分で移動したことをほめてくれました。ここまでとてもきんちょうした心が、やっとおちつきました。これから、もし本当のことがあったら、今日くんれんしたことを生かしたいと思います。

小学部5年生の課題『「新しい友達」を読んだ後で』、「ぼく、わたしと友達」という内容で自分の体験を書いてみよう。

「新しい友達」を読んだ後で

小5A 金山遼太郎(仲本学級)

ぼくは「新しい友達」を読んで、日本からヒューストンに来る時のことを思い出しました。

ぼくが日本で3年生の時、父の仕事の都合でアメリカに行くことになりました。ぼくがアメリカに行く1日前、先生が「遼太郎のお別れ会をやろう。」と言いました。クラスのみんなは大さんせいでした。お別れ会が終わった後、クラスのみんなで遊びました。その時ぼくは「ずっと、日本にいられたらいいなあ。」と思っていました。

ぼくは学校でさよならをする時、泣きそうになるくらいさみしかったです。ぼくはみんなとはなれるのが、かなしくていやでした。

アメリカに行く前、友達がキーホルダーや四つ葉のクローバーのしおりや、手紙もたくさんくれました。それをぼくは今でも大切にしています。

「新しい友達」を読んだ後で

小5A ワイスマン龍(仲本学級)

いつものように日本に帰ると、いつものクラスに入りました。ぼくは毎日友達と遊んだり勉強したり、そうじをしたりして楽しくしていました。そして、いつものように運動会に出て、初めてのバトンを使ったリレーで1位になったり、きんちょうしたりしたけれど、楽しくすごしていました。

日本の学校の友達は、ようち園の年少組からずっと一緒に、おたがいに毎年帰るのを楽しみにして、元気

に会って、元気にさよならをしていました。

でも、2年前のことです。ぼくの最後の登校日は、いつもとちがっていました。学級委員の友達が、ぼくにお別れの言葉を言ってくれているとき、突然泣き始めました。ぼくもなんだか悲しくなりました。また会える友達なのに、こんなに悲しくなったのは初めてでした。

「新しい友達」を読んだ後で

小5A 太田美礼(仲本学級)

私はまりちゃんと同じように日本の友達と別れてアメリカに来ました。私もまりちゃんと同じようにお別れ会をしてもらって、「美礼ちゃん、美礼ちゃん」と言われました。そして、日本の友達がアメリカに来てくれたときもも前の友達とは少しちがうような気がしました。

私がアメリカにくる時は、とても友達と別れるのが寂しかったです。さいごにバイバイした時は会話がありませんでした。きっとおたがいにさびしかったんだと思います。

そして、遊びに来てくれた時も、とっとうれしかったけれど、まりちゃんの時と同じように、友達のどこかがちがうような気がしました。最初、とてもいわ感があって、とてもシーンとしていましたが、そのいわ感になれると、たくさん話せるようになりました。

一番最初にした話はイースターのかわいいうさぎの女の子の着ぐるみの中に、男の子が入っていたことでした。

アメリカに来て、友達と別れて久しぶりに会う事によって、よりふかい友達ににれたのではないかと思います。日本に帰ってまた会うのが楽しみです。

◆パトロール当番予定表5月15日◆

～よろしくお願ひします～

	学年	順位	児童生徒氏名
★AM1 リーダー	小3	21	阿部泰我
		22	原 海聖
		23	ロバート グレイス
		24	宇野有紀
		25	久野翔平
		26	石山飛鳥
		27	塩田聖奈
★PM1 リーダー	小3	28	阿部佑香
		29	藤井 泉
		30	森北和志
		31	青木健成
		32	三輪直暉
		33	藤本莉乃
		34	佐野詩子

学習活動から

中三「新聞記事を読む」

《記事①》

2011年度から使われる小学校の教科書の検定結果が発表された。ページ数が増加、「ゆとり」へ大きく踏み出した。

【感想】

中3A 矢ヶ崎 朋樹 (宗吉学級)

日本の教育は急速に「ゆとり」路線へ傾いている。トップの水準だった日本の学力は下落の一途をたどり、以前から「ゆとり」の見直しが検討されていた。その「改革」がまず教科書によって示されることになる。アメリカのそれと比べると日本の教科書はパンフレットのようなものである。それでは「ゆとり」といわれても仕方ないだろう。

そもそもなぜ「ゆとり」が始まったのだろう。この「ゆとり」傾向は、1980年代あたりから始まったらしく、そのころの学校はとても荒れていた。それを見兼ねて学校生活にゆとりを持たせ、楽にしてやることで反抗させないための処置というのが一般論である。

また、生徒の二極化を食い止めるというねらいもあった。

結局荒れていた時代に戻るということになるが、つまり我々は「ゆとり世代」というレッテルを貼られていくことになる。甘やかされていた世代である。なにか自分は劣等感を感じてならない。この20年余りの「ゆとり時代」が、我々が日本の中心になる時代へ与える影響が大きいような気がしてならない。

《記事②》

2009年の女性の労働人口は過去最多だったが、完全失業者が前年比25%増と大幅に増加した。

【感想①】

中3A 山田 菊之介 (宗吉学級)

僕は、この経済危機の中で女性の失業者が増えたのは当然だったと思った。それは、何万人もの男性が仕事を失っている時期なので、今は、やる気、能力、責任感の強い人だけがついていける世界だと推測できるからだ。特に獲得するのがとても難しい技術を持っていない短期労働者が、しっかりした仕事を得るのはとても厳しいだろう。

この記事を読んで自分の将来のために、今から誰にも負けない力をつけていかなければならないと強く意識した。今僕は英語とバイオリンで力をつけてきているが、日本語での読解力を一つの課題として前に進んで行きたい。(この項、右上に続く)

【感想②】

中3A 全 伽蓮 (宗吉学級)

女性の労働者が増えているのは、日本の家庭の家計の苦しさを聞いていて納得だ。労働力率上昇に貢献しているのが25から35歳の既婚者ということは、やはり家族を支えるには経済的に厳しいということだろう。主婦だって大変なのに、その上仕事をするのは本当に難しいと思う。

現状の女性は頑張っている。それなのに報われない人が大勢というのは悲しいし、自分の将来のことが非常に心配になる。もっと女性が働きやすい環境ができればいいけれど、不況が終わるのを待つしかないと思う。

「志あり 目覚めありて 行え」

左頁の記事①を読んだ矢ヶ崎君が感想を書いています。1980年代の学校は確かに荒廃していたように思っています。校内外での暴力事件、窃盗・万引き、恐喝、器物破損、シンナー等麻薬の吸引、不純異性交遊等、犯罪と名のつくものは何でもあった時代だと言えます。

そのようなときの学校教育の重点目標としては、「生徒指導の充実」と「道徳教育の徹底」が多くありました。

以上のような教育状況の中、私は「志あり 目覚めありて 行え」を校訓とする昭和59年に開校した2年目の中学校に転任しました。校長先生は荒れている生徒の現状を踏まえ、「モグラ叩きのような生徒指導はいらない」「その場限りの道徳教育では限界がある」とし、「人間存在の本質に迫る生き方在り方教育を実践せよ」と全職員に命じた。その実践の中核を「生き方在り方を希求する進路指導実践」に設定し、私に進路指導主事を命じた。

正直なところ、それまでの私は、進路指導は受験指導であり、学力増強指導であると信じて疑わなかったし、目指す高校に合格させることを教師として、至上の喜びとしていた。それ故、この人間として「生き方在り方」に波及するような教育実践は、この受験戦争の最中であっては思いもよらない事であった。

校訓「志あり」とするとき、生徒たちには志がなくてはならない。また、「目覚めありて」とするときには、深い自己理解(自己の能力、興味・関心、体力等についての個性理解)がなくてはならない。更に「行え」とするときには、目標を設定し、その実現に向かって着実に確実に歩を進め、事実として自己実現しなくてはならないのである。

生徒に尋ねた「君の夢や目標は何?」。生徒は物憂げに「別に・・・」と、あとの質問を拒否するかのごとく下を向いて答えた。しかし、横を向くのではなく、「下に何か夢や希望が埋まっているのを探している」と、私はその答えを受け止め、自ら自身「志を持ち、常に目覚め、確実に教育実践に邁進しよう」と決意した。この校訓は素晴らしいと思っています。児童生徒のみなさんには、志を実感して、努力してほしい。「目覚めよ!直ちに」